

西東京市

市民の戦争体験記

(一)

目次

発刊にあたって	1
私は「おしん」でした（海老沢ヤマ）	2
空襲により負傷し、死亡した姉を看取るの記（遠藤綾子）	4
戦場だった田無（加藤猛四郎）	7
「戦後六十年 忘れない内に」より（桜井敏雄）	9
「我が人生の記録」より（永添泰雄）	12
戦災にあって（馬場はつえ）	15

発刊にあたって

この「戦争体験記」は、西東京市の非核・平和宣言事業の一つとして市民の方々の戦争体験をまとめたものです。戦後六十三年が経過し、あの戦争を体験された方々も少なくなりました。再びあのような惨禍を繰り返さないために、戦争の体験を語っていただき、体験を伝えていくこととしました。

すでにこのような戦争体験記は、田無市、保谷市の時代にも公民館、図書館や市民グループ、労働組合などからも発行されております。それぞれみな平和な世界を築いていくために、「戦争体験を後世に伝えよう」と積極的に取り組み冊子として残されております。

この「戦争体験記」の話が出た時も、「すでにいろいろな団体などで発行しているので、今さら同じようなものを発行する必要は無いのでは」という意見もありました。しかし、「今だからこそ話せる」という話もあるでしょう、また語り継いでいく場を作ることが、まさに語り継いでいくことにもなりましようし、また近代の歴史を生々しく伝えていくことにもなるでしょう。

今回は六名の方からの体験を掲載いたしました。多くの方の体験を、より多くの方々に伝えてゆきたいという願いから、聞き書き、本人の原稿、既発表のものからなど多種多様な掲載方法をとりました。

今後も西東京市の非核・平和宣言事業として戦争を再び起こさせなくてはならない、戦争のない平和な世界を築いていこうという想いも込めて、次世代へ戦争体験を語り継ぐ「戦争体験記」を発行してい

く予定です。

体験をお持ちの方はご連絡ください。お待ちしております。なお、発行の性質上、西東京市在住、在勤の方、または旧田無町、旧保谷町での体験をお持ちの方に限らせていただいております。

市民参加ですめる

西東京市の非核・平和宣言事業

この「戦争体験記」を発行するなど西東京市の非核・平和宣言事業は、市民参加のもとで積極的にすすめています。

中でも特徴的な事業は、毎年四月十二日を中心とした「平和の日」事業です（一九四五年四月十二日、田無駅前などに一トン爆弾が落とされ、多くの人が犠牲になりました。市はこの日を条例で「西東京市平和の日」と定めています）。パネル展や紙芝居、「コンサートなど、平和への想いを新たにする日」として田無駅前ビルにて多様なイベントを開いています。また夏には、若い人にも広島、長崎の体験を学んでもらおうと、広島や長崎での原爆慰霊祭に出席し、被爆者の体験などを聞く機会も設けています。さらに非核・平和コンサート、映画会、学習会など、年間を通して事業をすすめています。非核・平和事業へのご意見、提案などもお寄せください。

非核・平和をすすめる西東京市市民の会

西東京市

私は、「おしん」でした

西東京市ひばりが丘

海老沢ヤマ

一九三二年（昭和七年）生

戦争中のこと

私は、保谷小学校を出ると直ぐ十二歳で、地元では大きな兼田屋さんに奉公に入った。お店のご主人は、兵隊に取られ、その奥さんと、子供が六人そしておじいちゃんと八人の中に私が入りました。奥さんは体が弱かったので、私が小さな子供の子守をしながら、色々手伝いをした。冬の夜のオムツ洗いは、絞って干すうちに力チ力チになり、手は、しもやけになった。

当時、酒・味噌・醤油・塩・砂糖・その他日用品は、配給制度で、夜遅くまで配給の切符を整理するので、字を覚えた。朝五時に起きて、食事の支度をし、子守、店の手伝いと夜遅くまで働いた。夏は着物一式、冬は、着物と羽織一式の支給だったが、奥さんの実家が農家だったので、ひもじくはなかった。井戸水をバケツ二つで十数回汲んで運ぶのも重かった。疲れてもう足が持ち上がらないときもあった。乳母車に二人乗せて小学校を見に行ったが、休み時間になると恥ずかしいから帰った。高等科に進んだ友達も、工場へ学徒動員で授業はなかった。

昭和一九年十一月から、軍管区情報が出ると飛行機が飛んでくる。東京大空襲のときは、見えたのですよ。東京の空が真っ赤に夜明かりがパツツとついたように見えたのです。

だんだん空襲が激しくなってきた、もう毎日のように照明弾・焼夷弾が落ちて、農家の藁屋根が焼けて火事になった。

照明弾が落ちると昼間のように明るかった。直ぐ近くに爆弾が落ちて下田さん（十一人死亡）に一トン爆弾（昭和二十年四月七日）が落ちたときは、本当に凄かったですよ。

おじいちゃんは、店があるからいいという事で、防空壕に入らなかつたが、爆風でガラス戸がめっちゃめっちゃに成った。防空壕の中でも、ポートのように揺れた。

爆弾が落ちたとき、胡坐をかいてその間に子供を抱いて防空壕にいたが、爆弾が右側に落ちたとき、体が持ち上げられ気がついたら反対側を向いていた。並木さん家で四人石井さん家で四人亡くなられた。今度は左側に落ちると左側の足が持ち上がる。今日の爆弾はおかしいと思つたら、あとで時限爆弾と知って驚いた。

また、別の日、一トン爆弾が落とされたあと「ちょっと見えてもいい」「行ってこいや」と言うことで見に行った。地震とは違い、何メートルかの大きなすり鉢になっていて、そのすり鉢を埋めに行かなければならない。しかし、子供たちは、すり鉢の穴を滑って遊んでいた。

その時の、一トン爆弾で宝樹院のお墓は、めっちゃめっちゃに倒れていた。

戦後のこと

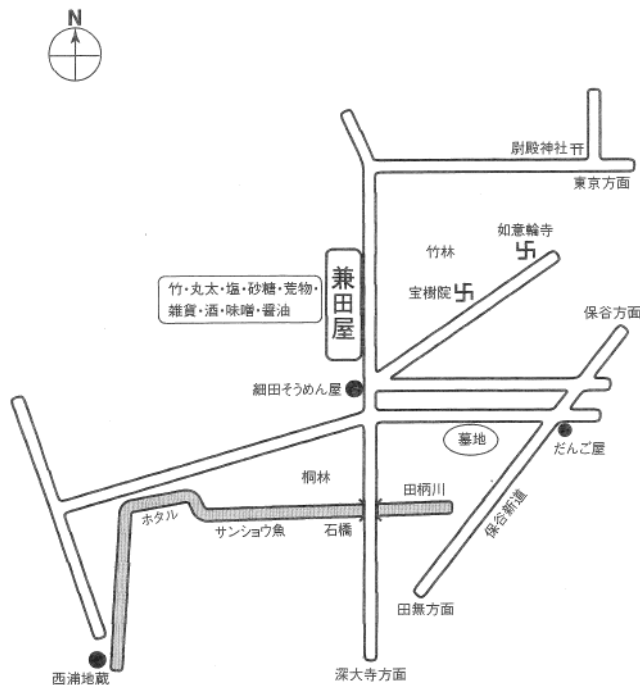
戦後も配給があり、自転車でリヤカーを引いて武蔵境まで味噌二斗ダルを二つ取りに行くのだが、田無の坂が苦しかった。雪の日御用聞きでリヤカーに積んで薪を運んだときは、雪が積もって前に進まなくて難儀した。

田柄川用水のあたりは、蛍がいっぱい、山椒魚もいた。住み込みのつらさは、何とも言えないね。夜遊びは、出来ないし、成人式にも出られなかった。その時は、記念品に印章が配られた。

戦後も九年間兼田屋さんで働き、昭和二八年西武鉄道にお勤めの方と結婚した。そして長男・次男を流産、昭和三十一年娘を出産した。主人は、四十二歳で脳血栓で急死した。

その後、早朝は保育園で、昼はスーパーの品出しで、夕方は保育ヘルパーで働いた。そして保険をかけて少しずつ積み立て、今の家を建てた。六十三歳のとき軽い脳内出血をしたが、苦勞してきたおかげでこれまで元気に働けた。この世に自分が生きてこれたことに、みなさんにお礼を言いたい。

この文章は、海老沢ヤマさんにお話しいただいた内容を要約したものです。



※ 海老沢さんの記憶を元に作成
(制作者：置沢 満)

空襲により負傷し、 死亡した姉を看取るの記

西東京市南町

遠藤綾子

一九三〇年（昭和五年）生

私の姉が被爆したのは、昭和二十年八月七日豊川海軍工廠（愛知県豊川市）が米軍の空爆を受けた時です。当時は軍需工場といえば諸々の軍事施設、軍隊駐屯地と共に空爆の標的にされていたので、とうとうその日が来たという感じていたが広大な敷地九十万坪と建物七百棟と云われる工場群が空爆開始後少なくとも二十六分間で全滅状態になりました。（投下された爆弾三千二百六発八百四十四トンという量で死者二千五百四十四人内学徒四百五十二人・負傷者一万人というすざまじいものでした。）

その時、私も動員学徒の一人として工場に居たのですが幸運にも助かり余りにも凄い衝撃に、たまらなく母が恋しく、どうしても顔が見たくて共に逃げた友人二人と家と同じ方向だったので寮へは帰らず、家まで帰ってしまったのです。無事を喜んでくれた家の人達は翌日になっても消息不明の姉を心配し四十キロメートル余りの道程を自転車で探しに行くことになりました。その頃の交通機関は切符がなかなか買えず思う様に行動が出来なかったのです。父と私、そして

近所のおじさんの計三人で一緒に行って探すことになり、早速豊川工廠へ着くと先ずは、私が担任の先生に勝手な行動をとったことを詫び、姉の行方不明を告げると先生から負傷者は急造の民家を野戦病院にした所に収容されているらしいとの情報を得、片端からそうした場所にとび込み、何ヶ所目かで姉を見つけたのです。

ところで病状は見ただけで思わしくないことが分かりました。それでも見つけた時の喜びは大きく、同行して下さった近所のおじさんがすぐ引き返して母に伝えてくれることになりました。早速父と二人枕元ににじり寄り、そこで怪我の軽いことを喜びあったのですがこれは大きな間違いでした。顔にあった三センチメートル位の傷が外に二箇所乃至三箇所というだけで全体には外傷はなくホッとしたのも束の間、姉が苦しそうな咳をすると同時に茶色の液体を吐き出すのです。量にして湯呑茶碗八分目位、とても苦しそうに吐くのでした。

少し気分がよいと姉自身の口から自分の怪我について説明があり、父が「そんなに一生懸命しゃべると苦しいだろうから慌てなくていいよ」と云うと「ダメちゃんと説明しないと私は死ぬかも知れない」と言って苦しい息を抑えながら説明を始めました。「空襲警報が鳴ると同時に友人と一緒に壕にとび込み、殆んど同時に始まった米軍の爆撃の為に壕の中の側壁が崩れ始めてどんどん壕内が埋っていくので、このままでは駄目になると思い数人が一緒に出て少し走った所で

弾が落ちてきた。すぐ臥せたんだけどお腹に爆風を受けて倒れてしまった。フウと気がついたら誰か男の人が、「オッ！ここにも倒れている。生きているぞ」といって 私を背負って逃げてくれた。後は気がついたらここに寝かされていた。吐いたものが茶色なのは血液が混じっているからだというのが姉の説明でした。なにしろ、急造の野戦病院の為人手不足、医師は大勢の負傷者の間を走り廻っているのです。全然姿は見当たらず、看護婦さんとおぼしき人もなかなか目に映らず、そこに収容されている負傷者は狭い所で体と体がわずかに離れているだけ、重なり合わない様に寝かされていました。その寝かされている人達も、破れたりドロドロになつていたであろう衣服は全部脱がされ、裸のまま畳の上に横たえ毛布一枚掛けてあるだけという惨状でした。顔や首の辺りの肉が弾の破片にやられたのでしょうか、大きくそげ落とされ、そこに塗つてあるのは赤チンだけ、傷が大きく深いので「痛い痛い」と苦痛でうめく少女、「お母さん」と云つて涙を流している人、傷口には蛆が湧いて這いまわる、そこが痛いからと云つて私の足を掴まえて、看護婦さんこの蛆をとつて」と訴える人、私は看護婦さんになりすまして出来ることはやってあげました。

姉の方は父がつきつきりで(といつても薬はないし何等かの手当ての方法が見つければと云つより医療従事者の不足、医薬品ゼロの状態だった様で姉はただ体を横たえているだけ)、水と云えば脱脂綿に湿した水を唇の周りに塗るだけで

ある。内出血のためか、苦しみもだんだんひどくなり、私は昨日ここへ来てから殆ど眠っていないと云つ。父は少しでも眠つた方がよいと云うが……姉が苦痛の声を発する度に父は「しっかりしろ」と励ます。私はただオロオロと涙するばかりでしたが、私達にすれば姉が見つかっただけでも幸運と思ひ、徒らに時が経つのみでしたが、その間、姉は幾度も「母が来ない母が来ない」と待ち焦がれ、それをなだめるのは本当に辛いことでした。

余りにも苦しかったのでしよう、姉が父に「お父さんお願いがある」と云つので、父が「何でもいいよ、云つてごらん。お父さんに出来ることなら何でもするよ」と云つたら、「そこにナイフ持っている」と聞くのです。父が「ナイフは持っていないけど何に使うんだ」と云つたら、「私、もうこんなに苦しいのイヤ私を殺して」と云つのです。その時の父の表情は今も忘れません。溫和だけれど厳しさ一辺倒の父の眼から涙がいつぱい流れ、それを姉に気づかれない様「何故そんなことを。苦しいだらうけど頑張れ、今に医者も薬もくるだらうから頑張つて、ナア頑張れよ」と云つて姉の右手を必死に握り締めているのです。私も負けじと左手をしっかりと握り放しませんでしたが、その三十分後、急に身体から力が抜けた様な感じがしたかと思うと、静かにつぶやく様に「やまうち」と自分の名前を口にしながら息を引きとりました。

裸のまま畳の上に寝かされさぞや痛く辛かつたであろうナと思ひ乍ら女の子がこれでは余りにも哀れと思ひ、私の防

空袋に入っていた、当時の服装であったモンペと上衣、下着一式を私の手で着せ旅立ちの衣掌として貰いました。その時、父が涙いっばいの顔でとても喜んでくれたこと、結局臨終には間に合いませんでしたが母があとになって、アンタが着せてくれたあの上下の衣類で私はとても救われた」と云ってくれたこと等、今でも私の心の中にそうした両親の映像が焼き付いています。父が衣服を身につけた姉の上半身を抱きあげて「サア水をいっばい、腹いっばい飲めよ」と云って湯呑を口もとにもっていったこと、それを私が受け止めて二人で号泣したこと等々、どうしても忘れられません。

私は三年生でまだ寮に帰らなければならないので、母を待つ父をその場に残し、帰寮して先生に報告、姉の死を聞くや下を向いたまま先生は顔を上げず、「じゃあすぐ家へ帰れ、帰ってお姉さんの葬儀に出席しなさい」と云って下さり、私はそのまま家に帰りましたが、姉の遺骸は軍の機密に属するという理由で下げ渡しては貰えませんでした。数日後に帰ってきた遺骨は骨が一部赤茶けた様になっており、両親は「これが内出血の跡かな」と想像するしかない状況でした。噂では死者は独りだけでなく数人一緒に荼毘に附されたとかで本当に姉であるかどうかは分からなかったのです。唯一の救いは姉は学徒動員で入寮の前、髪の毛と爪を残して家の机の引出しに入れてあったのです。両親は遺骨は分からないけど、これは真実姉のものだからこれでよしとしようとお骨と一緒に葬りました。

このような悲劇は姉達だけではなく急造の野戦病院に収容された多くの負傷者、特に孤独にさいなまれ乍ら死んでいった若い乙女達（殆んどが遠隔の地から来ていた女子挺身隊の方々ということでした）で、今、振り返ってもゾツとします。このような悲惨な空爆のない平和国家でありたい、終戦祈念日を迎えるに際して「死亡した姉を看取るの記」を書きました。当時姉は十七才・私は十五才、日本の勝利を信じて疑わなかった軍国乙女のふたりでした。

戦場だった田無

西東京市谷戸町

加藤猛四郎

一九三一年（昭和六年）生

終戦から三十九年が過ぎた今、当時の辛酸な苦痛も、唯の懐かしい思い出と変化してしまつたような感じである。だが毎年八月十五日が巡って来るたびに、腹をよじられるような爆弾の炸裂する地響きに恐れ戦いていた頃を思うのです。

その頃私は杉並区荻窪に住んでいた。大東亜戦争が始まつたとは言つても、それ程の切迫感はなかつた。昭和十七年四月十八日の昼間、見慣れない双発の飛行機が飛んでいた。爆音も機体も日本軍のものではなかつた。おかしいなと空を仰いでいるとき、突如として空襲警報がけたたましく鳴り響いた。これは後で分つた事だが、アメリカ空母、ホーネットから発進したB 25爆撃機十六機が超低空飛行で日本本土に進入し、爆弾や焼夷弾を投下して中国へ飛び去つたと言つ。これが空襲に遭つた初めであつた。

そして同年七月、愛する兄の入営とビルマへの出征、時折り送られて来る葉書にはビルマの農村風景等が平和なたたずまいのように画かれてあり、戦争という悲惨なものとはなかつた。唯兄と離れていることの淋しさだけが募つたものでした。

私達一家は昭和十九年春頃（当時私は十三才）、父の転職で中島飛行機、試運転工場の富士見寮の寮監督として住込みました。場所は小平市公立昭和病院の南、現多摩湖サイクリング道路の際、地図で見ると小平市天神町一丁目と花小金井六丁目の境位の位置、現在三菱ビルテクノサービスと思斉西寮が建っています。当時は畑の中で太陽が昇り、西へ沈むまで両方が見られる広い場所でした。ところが十二月十三日、寮生のタバコの火の不始末で全焼しました。私が火元発見者なので田無警察署に初めて連れて行かれ事情調書を取られました。そんな訳で田無へ移りました。場所は田無神社の裏、新青梅街道沿い、現在の安楽亭（以前はデニーズ）の辺りに清元寮というのがあり、その北裏に無人だった誠和寮があり、我々一家と寮生さん達一同、着のみ着のままに移り住みました。ここには現在の北原住宅から第二中学の辺り（当時、第八都営住宅周辺）に、陸軍の高射砲陣地があつて、空の守りを固めていた。まだこの頃は高い建物がなく太陽が東から昇り西へ沈むまで眺めることが出来て、杉並とは違って「何と雄大な景色だろう」と喜んでいた。

ここから昭和十九年十二月より昭和二十年にかけての戦争体験が始まつた訳です。

年が明けて戦局も段々と日本本土に接近して来た二月、三月には北原の高射砲が、南方より上空を飛来するB 29に一斉射撃があり、暫くすると上空で炸裂した砲弾の破片が無数に屋根瓦に音を立てて落ちてくるのである、正に戦場さな

らの有様であった。

高射砲陣地と中島飛行機（現住友重工）の前後左右、約五百メートルから一キロ四方に、爆弾が落され、近所の防空壕が生き埋めとなって死傷者が続出しました。私の寮から百メートル西の地点（現北原交差点、今は三角地帯が閉鎖されている）に一トン爆弾が落ちた時は、防空壕の中でズズーンという地響きと土砂をかぶって危うく生き埋めになるところであった。この一トン爆弾が落ちた跡は大きな穴となり（直径三十〜四十メートル、深さ五〜六メートル）、これに田柄用水の水が流れ込み池となり、近所の青年が泳いでいました（田柄用水はアスタビル北側の田無用水、現ふれあいのこみちから分水し、北原交差点を経由し遍立寺の南側より北原住宅の中へと、今でも中央通りの西側から暗渠があります。）

一トン爆弾が落ちた翌日、寮の西側の部屋は壁がすっかり落ち、ガラスも割れ大変な有様、更にはささくれ立った破片が柱の奥深く突き刺さっていた。この頃になってようやく遠方退避を始めた。小学生だった私は国民服と母の手製の防空頭巾をかぶり、一家で退避するのですが、夜間等は走って行くうちに親子ちりぢりになり、一層の恐ろしさが募るのでした。あるとき、急に大きな爆音が聞えたので空を振り仰ぐと、急降下して来るグラマンでした。操縦士がゴーグルをかけた迫って来るのが悪鬼のように思えたのでした。麦畑の中に身を伏せた瞬間、二〜三メートル横に土煙と共に機銃弾が打ち込まれたのです。私はこれで最後かと観念したものです。グラ

マンが機首を立て直すまでの間にと、私は脱兎の如く走りまわりました。後はどうやって逃げのびたのか、今もって記憶にないのです。又空襲警報が解除になり道を歩いていると、畑の中に落ちた時限爆弾が突如として爆発するので、全く生地獄そのものでした。

そして信州伊那への疎開で難を逃れましたが、最初は美味しい白米の御飯でしたが、半月もすると大豆七割に米三割の御飯に干しぜんまいの煮付といった毎日の生活が始まりました。空襲の無い日々と美しい自然の中での生活は決して楽しいものではありません。炎天下で桑の枝の皮むき、松根油を作るための松の根掘りと、東京では無経験だけに辛かったです。

こうして昭和二十年八月十五日、終戦となりました。翌年五月に兄が無事復員、しかし戦場からのみやげは、マラリヤの他三つも病を持ち帰り丸々五ヶ月の命で死去しました。全く無残な思いのした戦中戦後でした。今こうして書きながら平和であることの幸せをつくづく感じるのです。

この文章は、全国金属労働組合シチズン田無支部編「戦争体験集 あの日、あの時、私は」(一九八四年)に掲載されたものに加筆、補足しました。

「戦後六十年 忘れない内に」より

西東京市ひばりが丘北

桜井敏雄

一九二五年（大正十四年）生

召集から最初の現地包頭（ポウトウ）では

やっと日本に帰れるとの実感が湧いてきました。

ここ「ナホトカ」の町では日増しに寒さが厳しくなり、川には厚い氷が張り出し、太い丸太を二人で担ぎ渡つても、びくともしないまでに厚くなつたが、遠くには海が見え、港が見えるのです。

待ちに待って乗れた貨物船、その船の名は「大郁丸」といった、もうそこだ、日本は！

目の中に飛び込んできた最初の景色は、一面緑に輝いていた山並み、綺麗だ、目に眩しいほどに綺麗だった！

昭和二十三年十一月下旬復員船の上から見た舞鶴の最初の印象でした。（上陸して二三日したら特に良い食事が出、「勤労感謝の日」だったのを記憶しています）

想えば終戦の時から、はや六十年を過ぎ知人に勧められ、また、忘れない内にと思いつながらも途切れ途切れの思い出しか浮かばないが、取り敢えず「キー」を叩きながら纏めてみました。

当時、徴兵年齢は満二十歳でしたが、一年引き下げられて

十九歳となり、私もそれに引っかけかり、昭和十九年十一月の半ばだったと思いますが遂に赤紙が来てしまったわけです。

赤紙には「何月何日の何時までに高崎の連隊に入隊すべし」とあり入隊したが、その年の春、徴兵検査で私は第二乙種合格（骨肉ほぼ薄弱）となり八月の末から約一ヶ月の間、健民修練所に入れられ鍛えられたのです。

その頃、日本では「転進とか玉砕」が次第に噂に上る様になり、開戦時の華やかさから次第に沈みがちに変わりつつある時で、直ぐにも使える剛健な兵隊を作りたかったのでしよう。

入隊してから約一週間というものは、毎日が予防注射の連続で、それは、新兵を一行に並ばせ、衛生兵が並んでいる各人の胸にヨーチンをパッパと塗り、その上に、もう一人の衛生兵が注射器を持った手を振り上げ、モーシヨンと共に振り下ろして接種をしていったのです。針が曲がるうがお構いなしに接種をしていったのです。その日の午後は休養、次の日も、又次の日も、そして四、五日経った時、もうその時には外地行きだと皆が感じていました。

注射も終わったので近くに在る高崎観音へ参拝に行つたが、それが日本とのお別れの印でもあったのです。

高崎から汽車に乗せられ、銃も渡されたが、銃は我々人数の半数しか無かった。それでも其の銃は九九式という最新式の歩兵銃でしたが、銃と共に何と「竹の水筒！」をも渡され、そのチグハグさには皆が驚いた。

さて関釜連絡線に乗りあの「波高き玄界灘」を渡るとき、どうゆう訳か私が班の食券を配ることになり、各人に渡して歩いたのですが、殆んど兵が酔いの為受け取りません。内地では食事もろくろく摂れなかった時代、この時とばかりに「カレー」を三人前も食べ、久し振りに満腹感を味わったわけです。満腹感のついでに上甲板に上がって海を眺めると、はるか彼方に駆逐艦が二隻われわれの船を護衛している様に見えた。

高崎を出てから一週間程経った午後七時頃、内モンゴルの包頭に着いたのです。

昭和十九年十二月の初め頃か？と思います。小雪の舞いそうな包頭城門外で各隊に分けられトラックに分乗し、郊外にある部隊に入ったわけです。

我々の部隊は「戦車十二連隊」といい、其の中の砲兵中隊でした。そしていよいよ軍隊生活が始まるのでした。

「お前たちは、何時までお客さんのつもりで居るのだ！」内務班長殿からすぐさま、でっかい声で怒鳴られた。我々は途端にピリッとした。そしてこの言葉と共に軍隊生活の幕が切って落とされたのです。

最初、兵営内では内務班の事、外では軍事訓練をと、ピシッ、ピシッという程に毎日、毎日が教育でした。

ところで高崎を出る時は九九式の銃を支給されたのですが、此処に来た途端、直ぐに引き上げられ三八式銃に変えられたのです。それでも「竹の水筒」は正規の水筒に変わりま

した。

訓練は、何しろ営門を一步出れば遮るものとして無い平原で至る所が演習場となり、朝から晩まで「駆け足」「匍匐前進」「射撃訓練」などで、教育するほうとしては、だだっ広い原野はひと目で全般を見渡すことが出来て、これ程良い条件は無いのですが、我々教育される方としては少しでも手を抜くものなら直ぐ見破られビシリ、ビシリと罰が否応なく降ってきます。と言っているうちに毎日の訓練の賜物か、我々は次第にどうやら兵隊らしく成っていきました。

ところで我々の中隊は戦車十二連隊の中の砲兵中隊で、戦車を援護しつつ敵を撃破する隊で七五ミリ砲四門と砲を引張る四トン牽引車を主とし、その他、連隊内には戦車を援護する歩兵、工兵の二中隊があります。そして其の砲兵の中の私は通信に回ったのです。

なぜ通信に回ったのかは、或る時、班に日本酒の支給があり、其の席で順番に歌を唄わせられたのが原因でした。数日後、「通信になれ」と小隊長に言われたのです。小隊長は、「ト、ツー、ト、ツー」は歌の抑揚と似ているところがある、と言つのです。

変な話、私は小学校で歌は乙ばかりで甲を取った事は有りませんでしたが、でも何所が気に入られたのか不思議に思いますが、これも通信に回ったのです。

又、おかしな話、兵隊に行く前に叔父さんから「どうせ兵隊に行くなら何か身に付けるようにしろ。鉄砲ばかり撃って

いても駄目だ！」と言われ、其の上叔父も通信、又兄も通信だったので、その場で通信と決めた次第です。

ところで通信は戦車との連絡、砲との連絡で、それらの中心となると「観測挺身車」と言われる、背の低い戦車の砲塔を取り除いた様な車両があり、敵前に進み出て目標を確認し、わが方に連絡するのですが、今で言う「カッコいい」物だったので、乗りたい希望者が多く居ました。

通信の教育では幼年通信学校を出たバリバリの下士官が当たり、少しでも間違えば石炭ストーブの火をかき回す鉄の棒が、頭にブオンと降ってきます。

ある時、「あああ！通信で良かった！」と思わず心の中で叫んだ事がありました。

それは砲関係の同年兵が訓練中何かで怒られ、あの重い砲弾の入った弾薬箱（二発〜四発？）を担ぎ「駆け足、兵舎一回」の命令で息も絶え絶えに周り、遅い者は更に「もう一回」と言われ、計三回も居たのですが、この時程「鉄砲ばかり打っていても駄目だ」が有り難く思い出されたのです。

なお、軍隊ではこんな事が言われていました。楽なのは「にヨウチン（衛生兵）」に通信」と。

ところで訓練は日増しに実戦化し実弾射撃では、至る所が演習場となる為、砲を所構わず牽引車が引つ張り回し、目標を遙か彼方にある土饅頭と定め発射するのですが、我々通信は何もする事がないので砲隊鏡を覗き着弾点を見ていて、発射〇・五秒位から弾が飛んでいくのが分かり、短延期信管で

は着弾し跳ね上がった瞬間に爆発するのが良く判りました。その様な中でなんといっても一番の楽しみは食事です。

部隊の周りは一応治安が安定しているので、そんなに悪いものは出なかったし、週に一度代用食といって「パン食」だったが、副食の量が多く特に肉（種類不明）を充分食べる事が出来たので我々はかえって代用食の方を楽しみにしていました。

其の頃、内地では毎日の空襲で大変だと聞いていましたが、包頭では双発の敵機を一度見ただけで、偵察の為か線路の上を低空で通り過ぎて行っただけです。

其れかどうかは分からないが、間もなく全部隊が京城（現ソウル）郊外に移動することになりました。

冬も過ぎ春半ばの頃だったか？空には渡り鳥の大群（数十万羽以上）が一週間ぐらい、絶え間なく、横に広く長い帯状を作ったの大移動が終わった頃のことでした。

編集者注 筆者の体験記はこのあと京城、ハルビン、シベリアと続くが、長文のため、部分掲載とさせていただきますました。

「我が人生の記録」より

西東京市下保谷

永添泰雄

一九二二年（大正十一年）生

終戦のとき外地にいた兵隊はほとんどが対戦国の「ほりよ」となった。

私も北朝鮮においてその例に漏れず、朝鮮およびシベリアで二年半の歳月を過ごしたが、今静かに振り返ってみると、諸々の体験を通じて現在の生活にプラスになっていることは確かである。

その記憶が毎年毎年薄れてゆくのは致し方の無いのであるが、何かの機会に記憶の整理をしたい考えはあった。たまたま第一六回目の八月一五日を迎えたので、当時を思い起こして「ほりよの記」を書いた。

ゲルジア共和国クタイシの収容所で

殺伐とした風景を背景に、毎日重労働にせき立てられ、追い回され通しのわれわれが、何とか希望をつなぎ、何として生き抜こうとして求めた生き甲斐は、ただもう、懐かしい日本の土を一度でよいから踏みたいという、ただそれだけしかありませんでした。

しかし、何時日本に帰れるのか皆目判らず、「日本に帰れ

る日」は、なかなか来そうにありませんでした。皆の気持ちは、何時しか焦りとなってすすんでいき、とうとうあの人が「と思われるようなおとなしかった人までが、荒々しい言葉で同僚に食ってかかったり、また、配給のパンの大きさのほんの少しの違いにも、仲違いを起すようになりました。

日本国民は礼儀正しい国民だと聞きもし自負もしていましたが、生死の境においては全く、他人を押しつけても生き残ろうとする個人の意識が先に立って、全体の秩序を乱すのでした。生死をかけた人間性のありのままの姿には、全く眼を背けたくなることしばしばでした。

朝鮮にいた頃は日本のニュースも、時々友人伝えに耳に入ってきましたが、ソ連にはいつてからは、さっぱりでした。沈みきった私達の心の中では……。

日本政府は、われわれが日本を遠く離れた黒海の地に「ほりよ」となって運ばれてきていることを知っているだろうか？

日本政府は、われわれが、重労働に身も心も疲れ果てているのを知っているだろうか。

もう二冬も越したというのに、全然日本送還の話が出もしないのではないのか。

日本政府は、生命を祖国に捧げたわれわれを見捨てる気なのか？

と、われわれの気持ちはますます哀れになっていきました。一日のノルマで疲れて収容所に帰った夜、二段寝台の上で

話し合うことは、毎夜決まっていた。

何でもいい、日本のことを知りたい…と、皆が折に触れて望むようになったとき、Y副官の提案で「壁新聞」を発行することにになりました。主としてプラウダ、イズベスチャアなど、ソ連の有力新聞から日本関係の記事をとって、翻訳して壁新聞に掲載しました。特に、ソ連記者が厚木、横浜、東京などの進駐記を書いた東京見聞記は、虎ノ門あたりという写真もあって、相当に皆の注目を集めました。とにかく日本の写真を見るといのは、「ほりよ」の身となってから初めてのことでしたし、記事内容も新しかったので、何度も何度も読み返す人もいました。この壁新聞にはまた、投稿の随筆、短歌、短文なども盛り込み、なかなかの好評でした。

壁新聞に「ほりよ」の日本送還の話が載るようになったのは、二十二年の春になってからでした。二十一年ごろからソ連の正式機関の発表ということで、病人などは舞鶴に続々上陸しているというニュースが入ってきましたので、われわれも遠からず日本に帰れるぞ、という噂が出るようになり、それと共に、労働のない休みの日には演芸会をやるなど、何となく活気が出てきました。

壁新聞は、ここを発するまでずっと好評の中に続きました。

食物が少なく、要領も悪く、作業もなかなか思うようになりませんが、二十二年の春頃にはほとんどの作業班がノルマを一〇〇パーセント常に突破するし、また地区の作業

競技会では、一般ソ連人を尻目に、何時も堂々優勝ペナントを獲得するまでになりました。

そのためでもなかったのですが、映画も何遍か見せて貰いました。ソ連語ですからよく判りませんが、スターリンがスクリーンに登場すると観客は一斉に拍手をしました。お国柄なんでしょう。

映画のストーリーは、中央アジアの民族独立の伝記や、ある飛行士の物語など、なかなか味のある物でした。当時一緒だった松竹映画のK氏の話では、撮影技術などはまだまだ幼稚だということでした。

昭和二十二年の八月の中旬のある日、ソ連側から突然の帰国命令が出てからの私達は、死亡した十一人の墓参りもできないほど慌しい出発でした。私達が再び、いや他の日本人も恐らく、訪ねることがありません。このクタイシ市、血と汗と尊い犠牲者まで出した恨みのラーゲル（収容所）、骨と皮だけになった重労働、数々の思い出が飛び去ります。狭苦しい貨車の中で、異境の土に眠る十一名の戦友の霊よ安かれ、と祈らずにはいられません。途中トビリシで他の日本人の隊と合流します。ここで私達は意外な飛行機を見ました。プロペラのない、胴体の中が穴のあいたものです。それが滑走路を爆音ものすごく突っ走り空を飛ぶではありませんか。飛行機が通過してややしばらくしてからその爆音が私達の耳に聞こえてくるのです。今なら子供でも、ああジェット機かと知っていますが、当時私達は本当に壊れた飛行

機が飛んでいると、皆、思ったくらいです。

ナホトカを經由して日本へ

日本第一夜を畳の上で感激して眠れぬまま夜を更かしました。とにかく私も昭和十八年三月から、昭和二十二年十二月まで約四年九ヶ月の間、朝鮮、シベリアで過ごしたことになります、青春を犠牲にしたのですが、その中で一つだけ得たモノがあります。それはその日の充実を心がけるといふことです。これさえ十分であれば、何時いかなる時でも悔いはありません。

引揚局ですべての手続きが終わり、各府県別に区分されて帰郷ですが、このとき旧兵隊は皆一律に三百円の支給がありました。兵隊の時は一ヶ月十五円くらいでしたから、しめた三百円あれば、当分大丈夫だ。そのうちに働くところを探せばよいと思いましたが、それがそもその誤りです。

翌日、汽車に乗る前にふと見るとあるある、シベリアで夢にまで見た饅頭を売っている。やはり日本は良いところ。「はい十個で百円です」

と主の声に、聞き違いかと、二度確かめ改めて表の看板を見て、顔が「カーッ」と赤くなった。知らぬことは恐ろしい。貨幣価値を全く知らぬ今浦島です。あと二百円しか無いぞ、これからどうするのだ、この馬鹿野郎など、複雑な考えが瞬間頭の中を稲妻のように通り過ぎました。

京都駅から市電が二円。畜生、歩いて帰るかと思っていた

ら市役所の復員係が市電のキップを呉れたので靴を減らすのが助かったが、引き揚げ先の伯父の家に着くまでに、舞鶴で買った金のほとんどが無くなっていました。

編集者注 筆者永添泰雄さん「我が人生の記録」は長文のため、部分掲載とさせていただきます。

戦災にあつて

西東京市田無町

馬場はつえ

一九二二年（大正十一年）生

昭和二十年三月二十八日に結婚しました。式は盛大にはできなくて、暗くした中で形だけでした。夫は兵役につくため、三月三十一日には東京駅まで見送りに行きました。私の実家は山梨で、夫は終戦まで山梨の実家にいるようにと言いましたが、結婚して夫の家に置いてもらいました。

夫とは職場で知り合いました。設計の仕事をしていたので、こういう技術畑の人は兵隊にとられないと思っていました。召集の決まっていた人と結婚すると決めたのは、若かったのですねえ。両親は驚いていました。

夫は長男で、両親と、妹と小学三年生の弟がいました。弟は、私が逃げてしまうのではないかと思って、しょっちゅう私のことを探しては、見つけると安心していました。いつ夫の家から逃げ出すかと、ご近所でうわさされていましたが、辛抱してがんばりましたよ。

空襲に遭う

その頃は、空襲の時どうするか教わっていました。まぶたと耳を押さえて口を少しあけて、肛門もゆるめないと言われて

び出してしまつと言われました。緊張したらそういう風でできないから、「緊張したらだめ」と自分に言い聞かせていました。

空襲があつて、家は玄関も押しつぶされて柱だけが残りました。家のすぐ先に防空壕がありました。そこに入るために空の下に出るのがこわくて、入れなかつたのです。でもそれで助かりました。入っていたらつぶされていたでしょう。小三の弟も、一度防空壕に入ったのですが、私を呼びに戻ってきたので助かつたのです。

田無が空襲されるとは思いませんでした。飛行機が飛んでいても、所沢の方へ行くとおもうていました。飛行機の計器を作っていたシチズンや中島飛行機をねらつたのでしよう。

爆弾が落ちる時は、ゴーっとお音を立てながらガラガラと落ちてきて、直撃された家はこつぱみじんです。一トン爆弾が落ちて、空襲後、前の二軒の家は消えて大きな穴があいていました。

買出しのおばさんが、防空壕に入れず、隣りの家の縁側に座っていました。おばさんの髪の毛が、恐怖で逆立っているのを見ました。人間の髪が、本当に一本一本立つんですよ。初めて目にしました。

しばらくして警防団の人達が飛んできました。「ああよく助かりましたねえ！」と驚いていましたよ。（爆風で飛ばされて）自分と弟は麦畑の土の中からモゾモゾと出てきたんで

すが、ガラスの破片で血だらけでした。「どうやって助かったんですか」と聞かれましたが、口の中は泥だらけで・・・わかったですよ。

境新町に時限爆弾が落ちていて、空襲が終わって皆がほっとした頃、爆発しました。空襲が解除になっても安心できないんですよ。

夜は、唐紙や板戸を拾ってきて、立てかけて寝ました。空襲の数日後、あの買出しのおばさんのリュックが遠くに転がっていて、弟が引きずってきたら、中にお芋がいっぱい入っていました。

空襲の時のことで一番覚えてるのは、土の中から出てきた時に見た光景です。杉山と竹藪が続いていたのですが、杉の木がみんな無くなった中に残って傾いた高い枝に、隣の娘さんの赤い着物が裂けて、引っかかってヒラヒラしているのを見たのです。その時、「日本は負ける」と思いました。そんなこと言えませんでしたけれど。娘さんのお嫁入り用の着物だったのね・・・今でも目に浮かぶ光景です。忘れられません。戦地も、銃後もないと思いました。

当時田無はあちこちに茶畑がありました。家が爆弾で潰れた後、逃げる所もなく、空襲の時は茶の木がこんもりしている下に横になっていました。とにかく空の下に出るのが恐かったです。肥をまいてあることなど、気にもなりません。

毎日のように空襲があつて、あのB29の音は、戦争が終

わって平和になってからも、すぐに分かりました。こわくて上を見られないから、見たことはありません。音だけです。荷物は山梨の実家へ疎開していましたが、甲府盆地にも赤いじゅうたんのよう焼夷弾を落としたそうです。

今、イラクなどのニュースを見ると、可哀想です。一般人がね。ずっと日本は平和だったから戦争のことが分からず、戦争をしたがつていますが、大変ですよ。

出征の時は、田無神社で挨拶をしました。兵隊さん達にも食べ物がありませんでした。兵隊さんもみんな国を守るといふより、親や家族を守るといふ気持ちでしたよ。

私の家族は、みんな無事でした。夫は、昭和二十年八月二十五日に、横須賀海兵団から無事に帰って来ました。

昭和二十二年十月に長男が誕生しました。その頃には八センチの大根を買うのに、ずーっと行列でした。見るもの何でも食べられそうに思えました。野草も食べましたよ。あかざは、ゆでるとほつれん草に似た食感がありました。食パンは配給でしたし、バターもありましたが、アメリカからのでしたね。

昭和二十五年には次男が生まれ、二十八年には娘が生まれました。今はひ孫もいますよ。

夫は田無小学校へ通ったんですが、息子達も孫もひ孫も田無小学校へ行きました。佐々病院もまだ小さかったですね。おじいちゃんが病気だったので、指田先生がうちへ往診に来ていました。いい先生でした。

終戦

終戦の詔勅は、山梨で聞きました。桑畑の中で泣きましたが、怒りは感じませんでした。そういう風に育てられていましたから。

戦争で一番つらかったのは、やはり食べ物がなかったことです。持っていたものはみんな売って、食べ物を買おうとしました。白足袋まで、新井薬師の色街へ売りに行きました。

ある時、実弟が配給のコッペパンを持って来てくれたことがあります。お姉さんにあげよう！って喜んで来てくれたんです。でももう幾日か経っていたんでしょ、包みを開けて見るとカビが生えていて食べられなくて、悲しかったですね。

着るものは、当時は標準服というものでした。ひも付きの上つ張り風のものにモンペです。それに、サンダルや下駄を履いていました。

負けた時は、正直ほっとしましたが、怒りは後で湧いてきました。東条さん達、軍人を抑えられなかった。

国民は、勝ち続けていると思われていました。百年やつても勝つと言われたけれど、二、三年で負けてしまった。勝てる訳ないですよ、竹やりやバケツリレーなんかしてね。軍人は強いと自負していて、戦争をやりたかったんです。気持ちを鼓舞するためにいろんな歌もあって。「いざゆかん 弾も機雷も乗り越えて、うちで真珠の玉と砕けん」っていう、

真珠湾攻撃の時の兵隊さんの辞世の歌を今も覚えてます。

戦争中は、楽しいことなんて何もなかったですよ。桜を見て、いいなあと思っていました。桜は、戦争をしていることを知らないんだなあ、と、うらやましく見ていました。

甘いものが食べられなかったので、戦争が終わったら、大福とかりんとうを食べたいと思っていました。今は、かりんとうを食べたいと思わないのにな。

夫の話では、海軍では上官だけがぜいたくをしていたと言っていました。自分達だけ、かんぱんを油で揚げて、砂糖をまぶして食べていたそうです。

夫と私は同い年で、二人とも元気です。私は踊りのけいこをしています。一緒に習っている若い人は、私と三十歳も離れています。踊りは難しいふりを覚えるので、頭も使います。夫は家の中で詩吟を大声でやっていて、私は隣の部屋で大きな鏡の前で踊っています。着物は自分で縫っています。

こういってお話は、あらためて人に話すという機会もないですし、聞いてくれる人もいるかいな。自問自答していつも思い出していましたけれど・・・こういう機会があったからおしゃべりができました。

本当に・・・戦争には勝てるはずがなかった。あの赤い着物が切れて枝に引つかかって、なびくのを見た時から、ずっとそう思っていました。あの光景が目に残って。

今の人は、戦争という言葉は知っていても、どんなに大変か知りませんよね。

戦争の前も、あの頃は「非常時」と言っ、娘の頃から戦争というものが常に頭にあって。日本というのは小さい国なのに、戦争して大丈夫なのかなって思っていましたけれどね。今日はいろんなことをみんな話せました。

この文章は、馬場はつえさんにお話しいただいた内容を要約したものです。

市民の戦争体験記（一）

2009年（平成21年）3月

編集 非核・平和をすすめる西東京市民の会

発行 西東京市 生活環境部 生活文化課

〒202-8555 西東京市中町 1-5-1

042-438-4040

e-mail bunka@city.nishitokyo.lg.jp

